
REDEMPTION

スチール缶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

REDEMPTION

【Nコード】

N5653A

【作者名】

スチール缶

【あらすじ】

少年は少女に自らの存在意義を見出だし、少女は少年との未来を夢見た。だが世界はそんなにも優しくない。生体兵器の少年と一人の少女の悲恋を描く、恋愛ファンタジー。

プロローグ（前書き）

お気付きの方も多いでしょうがこれはGack tのREDEMP T IONの歌詞を聞いて僕が勝手に考えた小説です。

なので歌詞の解釈が違う、ガツクンはこんなことを言いたいんじゃないなどの苦情は一切受け付けないのであしからず。

あ

とこの物語を読む前に曲を聞くのもおつな読み方です。

プロローグ

「この子の名前はルシフォンにしましょう」

女性はそう告げる。

その見つめる先には、培養液の中で眠る赤ん坊がいた。

しかもその数は一人ではなく、ざっと見渡しただけで数千個はカプセルが存在した。

すると、女性の隣りにいた白衣の男性は怪訝そうな顔をする。

「ルシフォン…。何もそんな不吉な名前を付けなくてもいいだろう。それでなくてもこれは製造番号が666だとゆうのに…」

「あら、名前は私の好きに付けて言いと貴方はいったはずよ」

「確かにそうは言ったが…」

白衣の男性は言葉に詰まる。

「それにこの子にはこの名前が一番ふさわしい。」

だってこの子は白銀と紅き眼を持つ墮天使。

愛を求めながらも、神の悪戯によって愛を奪われ墜ちてゆく運命にある子。だからこの名前で構わないわ」

「まあ、君がそこまでゆうなら、私は構わないが…」

女性の説明に白衣の男は混乱しながらも納得をした。（さあ、貴方は本当に私の見たとうりの運命を辿ってしまうのかしら）

すべてはここから始まった。

第一部（前書き）

警告

暴力的な表現があります。

で酷くないですよ。 多分…
。。。

この作品には多少（多少か？）の

あーでもそこま

（ ^ ^ ; ）

第一部

君は僕に希望を与えてくれた人

僕という“モノ”に存在意義をくれた人

この時が永遠に続いて欲しい

僕は今まで信じていなかった神にそう願った

でも神は

祝福という名の天使では無く

絶望という名を悪魔を

僕と君の間に送った…

〔REDEMPION〕

「……………」

僕は静かに眠る彼女の髪を優しく撫でる。
。

その閉じられた瞳が二度と開けられないと知りながら。
そして僕は彼女の額に別れの口づけをし、彼女の体に自分の力で火を放つ。

彼女の体を蒼い炎が包む。
静かに空に帰る貴方の姿を僕はただ涙が枯れるまでずっと見続けていた。

溢れる悲しみは僕の心に消せない傷跡へ
そして僕をあのかの頃の戦闘人形へと戻していく…。

でもどんなに“ココロ”が壊れても君の事だけは忘れわない。
僕はそう誓った。 蒼い炎が消え終えたのを確認して僕はその場を去る。 復讐を始めるために。

（神様アンタを信じたのが間違이었다。
結局この世界は歪んでる。

そして僕も。

そんな奴等の願いをアンタが聞く筈が無いんだ。
なら、世界のすべてが歪んでいるというのなら。

僕はこの折れた翔を羽ばたかせすべてを消してみせよう。

どうせ彼女のいない世界などに意味は無いのだから。

いつの日か終わりを迎える最後の鐘が鳴り止むまで…僕は戦い続ける。
あの日出会ってしまった彼女の無念を晴らすために)

話はほんの数か月前にさかのぼる。

+++++

僕は戦闘兵器としてこの世に生を受けた。

第三次世界大戦に突入した世界は通常の兵器では決着がつかず、僕のような生体兵器に頼るようになっていった。

だが、各国がそれをこぞって開発するため結局戦局は疲弊し、すでに何十年が経っていた。

そして今日も僕は仲間とともに戦場で戦っていた。

状況はこちらがやや不利だった。

ちょうどこちらが戦闘をした後に、違う部隊にいきなり襲われたため、対応が遅れ仲間の何人かは負傷し、戦闘継続不可能。すでに残り二人という所まで追い込まれていた。

「ルシフォン！そっちに一人行つたぞ！気をつける！」

僕の製造された後につけられたかりそめの名を、僕の姉のような存在であるメイデンが呼び、指示を飛ばす。

「了解…」

僕は無表情に頷き、敵を見た。

どうやら敵は戦闘服に身を包んだ重武装兵が三人。

対する僕は戦闘服は着ているものの刀しか持っていない。

どう見ても相手の方が有利な状況。でも、僕は臆する事無く相手に向かって行く。

敵は僕の接近に気付き、手に持つ自動小銃を乱射した。

「ぢやーはははは。」

ばかじゃねーの。そんなんで勝てるわけないだろ！

「とつと死にやがれ！」

「全員捕虜にして犯してやるぜ！」

「死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね！！」

三人が三人共好き好きを言っている。

目がおかしいことから、どうやら麻薬でもやっているらしい。

長く戦場にいる者には、そういう方法でしか精神を安定させる事ができない者もいるとメイデンから聞いたことがある。

当たり前だ。

僕ら兵器として生まれたモノの中にさえ、精神に異常をきたし処分されたモノがいるくらいだ。

僕自身でさえ、感情を表に出せないのと多少の言語障害を患っている。

普通の人間なら尚更だろう。

そんなことを分析しながらも、僕は着実に敵との間合いを銃弾の雨を刀で弾きながら詰めていく。

すると敵に焦りの色が見え始める。

「おい！なんだよあのガキは！？化け物かよ」

「チツ、あのガキは上玉だが仕方がない。」

「とっとと消しちゃおう」

そうやって、敵はロケットランチャーを取り出し僕に向かって放つ。弾道が一直線に軌道を描き、僕に着弾する。

「ひゃーホウ！ザマー!!!」

とそこまで言いかけてロケランを放った男の首は盛大に吹っ飛んだ。それをやったのはもちろん僕。

僕はロケランを受けたにもかかわらず、ほとんど無傷だった。

しいて言うならば戦闘服が少し焦げた程度だ。

僕は男の血飛沫を浴びながらも次の標的に向かい狙いを定める。

「ひいつ!?!」

僕に狙われた敵はいきなり狂ったように自動小銃を乱射した。

「来るな来るな来るな来るな来るな来るな来るな来るな来るなー!」

この男は先ほど死ねを連発していた奴だ。

(まったく…。撃ち方がなっていないな)

そう思いながらも僕は男へと向かっていく。

その時、何発か銃弾が頬と肩を掠めたが、気にすることなく進む。

そして男の自動小銃を刀で破壊し、そのまま心臓を突き刺した。

「ガッ!」

男は変な声を出し、口から血を吐きながら絶命した。残りの一人は仲間が二人ともやられたことで恐怖し、逃げ出していた。

だがそんなことを僕が許す筈もなく、すぐに追いつき男の前に立ちふさがった。

「うわぁ!」

男は僕を見て恐怖し、その場に座り込んでしまう。

そして僕にすぎるように目で僕に懇願した。

「頼む。許してくれ。」

い、命だけは助けてくれ!

捕虜でもあんたの夜の相手でも何でもする。

だから!」

だが刀を振り上げながら一言僕はこう言った。

「悪い…けど、そんな趣味…ない」

僕は男を両断した。

(これで全部かな…)

そう僕が考えていると、メイデン姉さんがやって来た。

どうやらあつちも全部終わったらしい。

僕に気付いた姉さんが僕に声をかけようとした時だった。

「二人共そこを動くな！」

敵の声と共に、いつの間にか僕らは囲まれていた。

「チツ、まだ敵がいたなんて…」

迂闊だったわ」

姉さんが悪態を吐く。

じわじわと敵が円陣を組みながら僕らに近付く。

このままでは姉さんが危ない。

そう感じた僕は、自分の“力”を発動することにした。

（さつきかなり使ったばかりだけど仕方ないか）

そして僕は力を発動させた。

すると僕の刀に蒼い炎が纏わりつき、その場で燃えていた。

それを見た姉さんが僕に向かって叫んだ。

「ルシフォン！やめなさい！」

さつきかなり使った後でしょう！」

でも僕はそれを無視して敵に炎を放った。

「ぎゃああー」

蒼き炎に焼かれ、敵が断末魔の叫びあげる。

敵は骨すら残らずに跡形も無く消え去った。

サイコフレイム

それが僕に与えられた生体兵器としての能力。

念力によって作り出される非物質の炎で、

相手を焼き尽くすまで燃え続けるという最凶の能力でもある。

「ルシフォン！大丈夫？」

姉さんが僕に心配そうに駆け寄る。

「…ン。大丈夫… 平気…だよ」

僕はVサインを作り、姉さんを安心させようとする。 だが、姉さ

んにそんな事では誤魔化されなかった。

「何が大丈夫よ！そこから動けないほど弱ってるくせに！」

図星…。

さすがは姉さん。 やっぱ誤魔化せない。

さらに姉さんは僕のおでこに手を当てる。

「ほら！やっぱり熱もあるじゃない」

「う…」

「まったく…。手間の掛かる弟なんだから。

姉にまで気を使わないの。

こーゆ時ぐらい少しは甘えなさい！ あんたはいつも頑張ってるんだから…」

「う…ん…」

姉さんに叱られ少し僕はうなだれてしまう。

「あーほらほら！ 別に怒って無いから。さ、私がおぶってあげるから行くわよ。

基地に帰って怪我の治療と休養をしなくちゃいけないんだから」

僕は頷いて姉さんにおぶってもらいながら戦場を後にする。

+++++

「…以上が今回の戦闘結果の報告です。

お父様…」

ここはバルハラ共和国軍首都防衛基地内指令室。

この一室には今三人の人間がいた。 先ほどの戦闘報告をしているメイデンとこの基地の指令であり、自分達の生みの親でもあるハデス。そしてメイデン達生体兵器全員の血縁上の親であるフレイヤの三人だ。

ハデスは戦闘結果を聞き満足そうな笑みを浮かべる。

「やはりナンバー666がかなりの戦闘能力を発揮しているようだな…、ナンバー664。

一個小隊をほぼ一人で全滅か…。

アレに何か精神的変化はあったかナンバー664？」

「……………」

だがハデスからの質問にメイデンはボーとしていて答えようとしていない。ハデスは少し強めの口調でメイデンを呼ぶ。

「ナンバー664！」

「……………」

しかしそれでもメイデンは反応しなかった。

ハデスはそれに腹が立ったのか大声を上げてメイデンを呼ぼうとした時だった。

フレイヤが優しい口調で口を開いた。

「メイデン、お父様が質問なっさているのよ。

答えてあげて」

フレイヤに呼ばれメイデンはハッとしたのかすぐに質問に答える。

「あっ！申し訳ありません。

ルシフォンの精神状態は以前変わりありません。

感情表現の欠落、言語障害共に完治した様子はありません」

メイデンの返答を聞き、ハデスはブツブツと何かを考え始める。

「やはりまだナンバー666は兵器としては不確定な要素が多過ぎるな…」

「……………」

その言葉を聞きメイデンは明らかに不快な顔をした。

メイデンはこの生みの親であるハデスのことが嫌いだった。

いや恐らく自分達兄弟の中でハデスに好意を抱いている者はいないだろう。

メイデン達のことを製造番号でしか呼ばず、出来の悪い者や逆らう者は容赦なく処分された。

そうこの男は自分の研究にしか興味が無く、命すらも天秤にかける

最悪の人物なのだ。

（ルシフォンの精神的な病だってあなたが原因だってことも気付いていないんでしょうね）

メイデンは目の前の男を睨み付けながらも、この男にある一つの事を頼む為にハデスに話しかける。

「あの…、お父様」

「ん？なんだまだいたのか。

戦闘報告が終わったのにまだいたのか。

それともまだ何かあるのか？」

つくづく嫌な奴だ。メイデンはそう思いながらもハデスに言った。

「はい。先の戦闘でルシフォンがかなり体力を消耗してしまって、なのであの子に休みを頂きたいんです」

「却下だ」

ハデスは即答した。

「そんなっ！無茶です！

あの子今四十度近い熱が出てるんですよ！

とても次の戦闘に出れる状態じゃありません！

あの子が死んでしまいます！」

「死ぬ？その言葉には誤りがある。破損の間違いだろう。

それにアレの変わりなどいくらでも作れる」

「しかし！」

「しかし？なんだ。もしその続きを言ってみるまずお前から先に破棄するぞ」

ハデスの脅しにメイデンは俯き、涙目になりながら部屋を出ていこうとした。

その時だった。

「ルシフォンへの休養許可しましょう」

「ほ、本当ですか!？」

メイデンがパツと顔を綻ばせる。

それを言ったのはフレイヤだった。 フレイヤはメイデンに優しく微笑みながら

「ええ、あの子に一週間の休養を与えます」

「ありがとうございます!」

メイデンはフレイヤにお辞儀をすると部屋から出て行った。

+++++

メイデンが部屋を出て行った後、ハデスはフレイヤに不満を漏らした。

「おい、フレイヤあまりあいつらを甘やかすものではないぞ」

「別にいいじゃない少しくらい休ませてあげても。」

それにルシフォンはそれに値する戦績は残しているわ。

それとも、あなたはここで貴重なサンプルをむざむざ失う気?」

フレイヤの言葉にハデスは口ごもってしまふ。

「いやそうゆう訳ではないが…」

「なら問題ないでしょう?」

ハデスは完全に黙ってしまった。

そんなハデスをよそにフレイヤは何処か遠くを見る様な目をする。

(ルシフォン…。これが私に出来るせめてもの罪滅ぼし、あなたはその後出会う運命に耐える事が出来る? いえ出会ってしまった後
も優しいままのルシフォンでいてくれるかしら …)

フレイヤは深く溜め息をついた…

第二部に続く

第一部（後書き）

えー 応次で完結すると思います（短すぎ）
んっー かルシフォンのお母さん（謎）発言多過ぎですね…

な

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5653a/>

R E D E M P T I O N

2010年10月9日13時04分発行